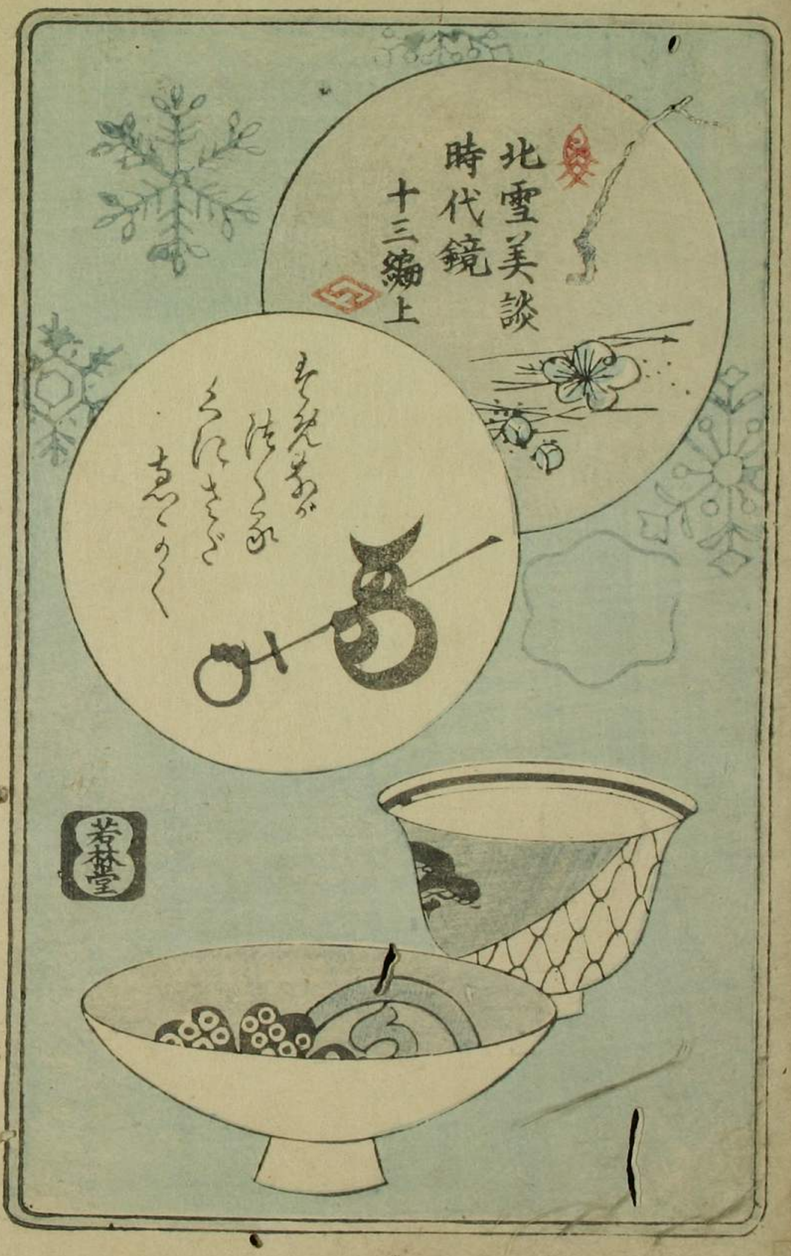
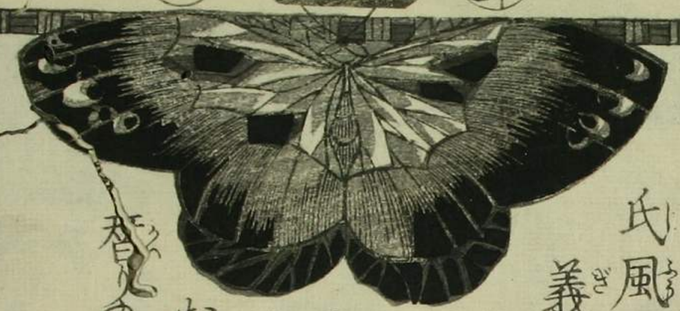
へ13
3031
3





昨日は今日は古くとする。移ろふ速き流行、變化。源氏風の大將髷も。澤山出もべ俗も愛も。美貌の義賊。前髪の光棍。今の時候は是あらんか。彼あらんと案ず凝せど。ひくくの意ずもて。編む小冊と。巻ず開くの看官。千人寄れば千のお眼千のお心ある故ふ。這方へ宜けれど那方へ向うぞ。實その以前柳亭翁ゞ。遲湯好た熱湯好きふ。たくられしへ的論ふて。上戸ふ餅ハ喰されぬ爻お。者りの十三編。縦ひお口ふ合ぎとも。お土産ふありと遊せとのふ。

安政五稔
午のとし春

爲永春水記

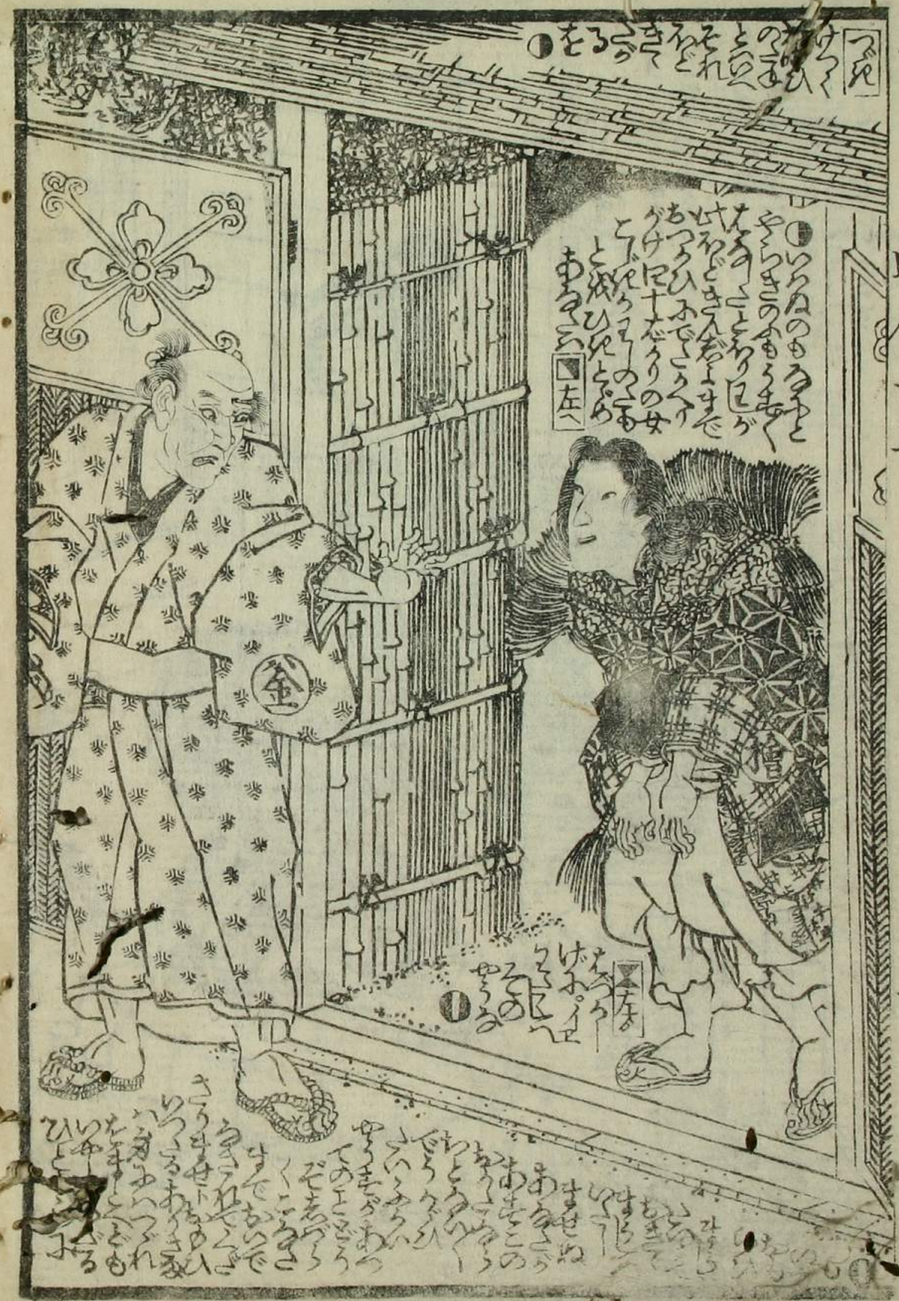
藤浪由縁之亟
舊怨の草履
なれそ春辰
尾上之助ゲ
面と敲つ緯
ハ次の編ム
初浦尾上之助

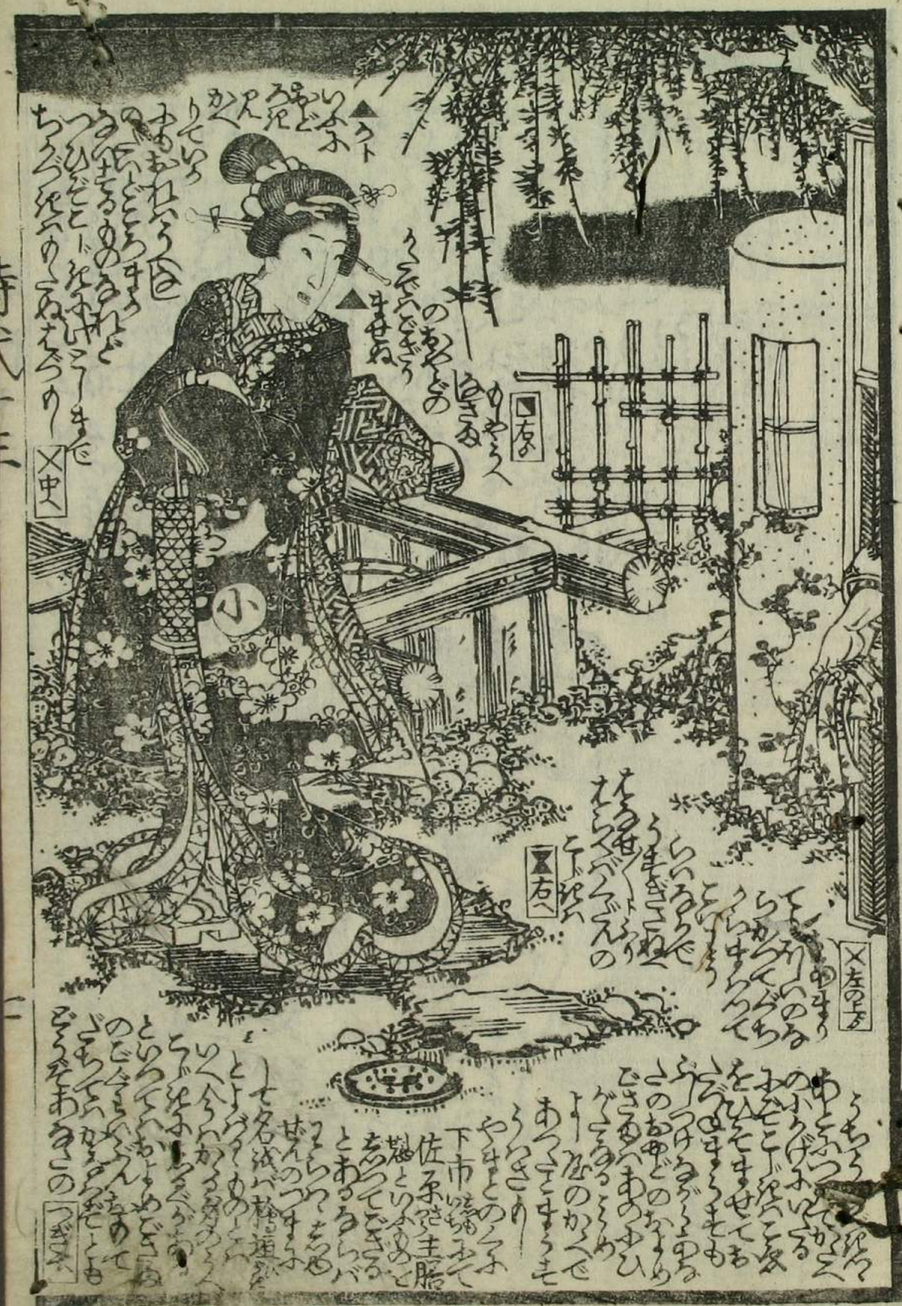
時代三
二
女乞食
實ハ軍平の妻
贋猪垣
魚
阿
京
谷
明代三
二
大和國
下市の
佐原
土膳

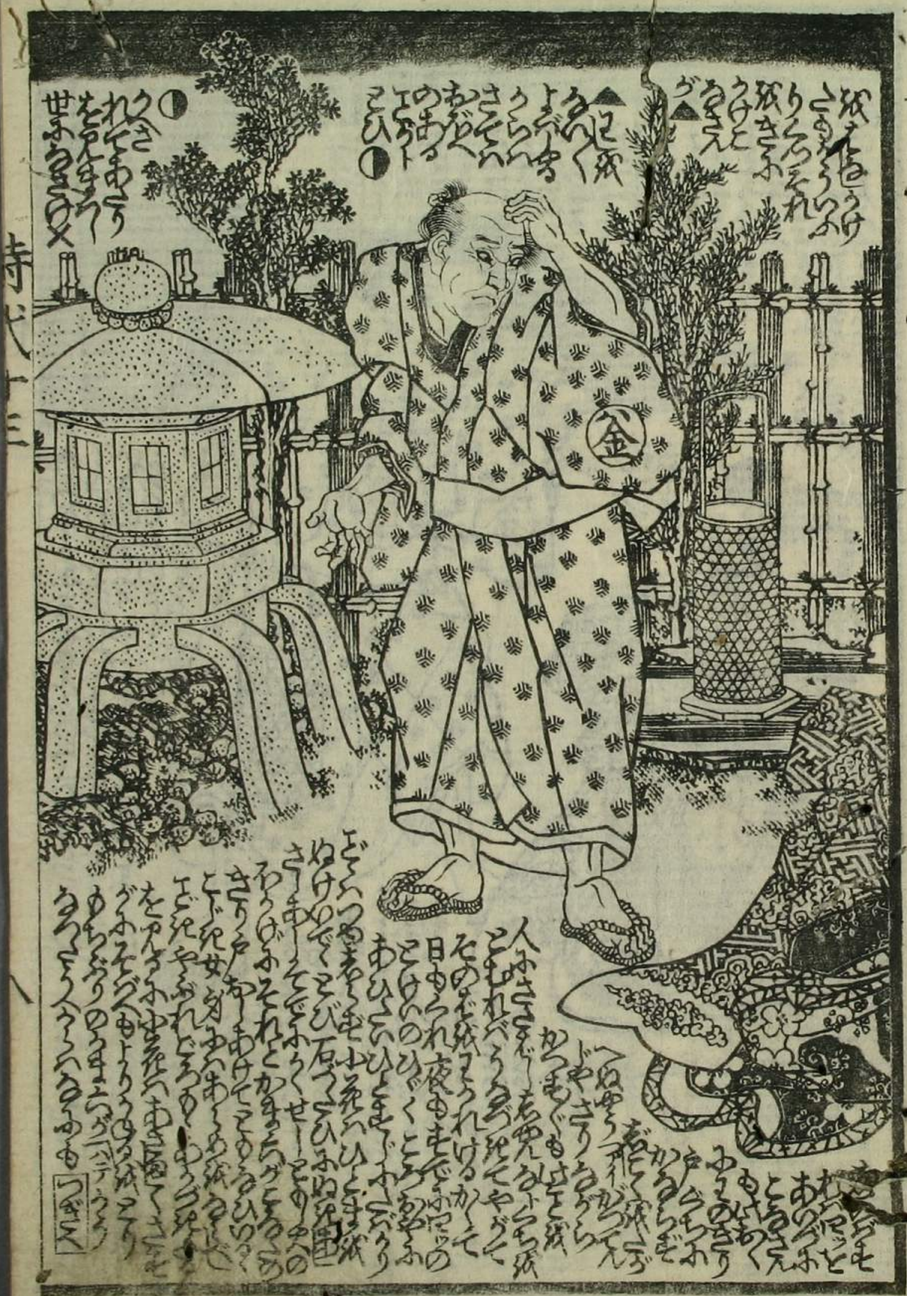
八谷

金

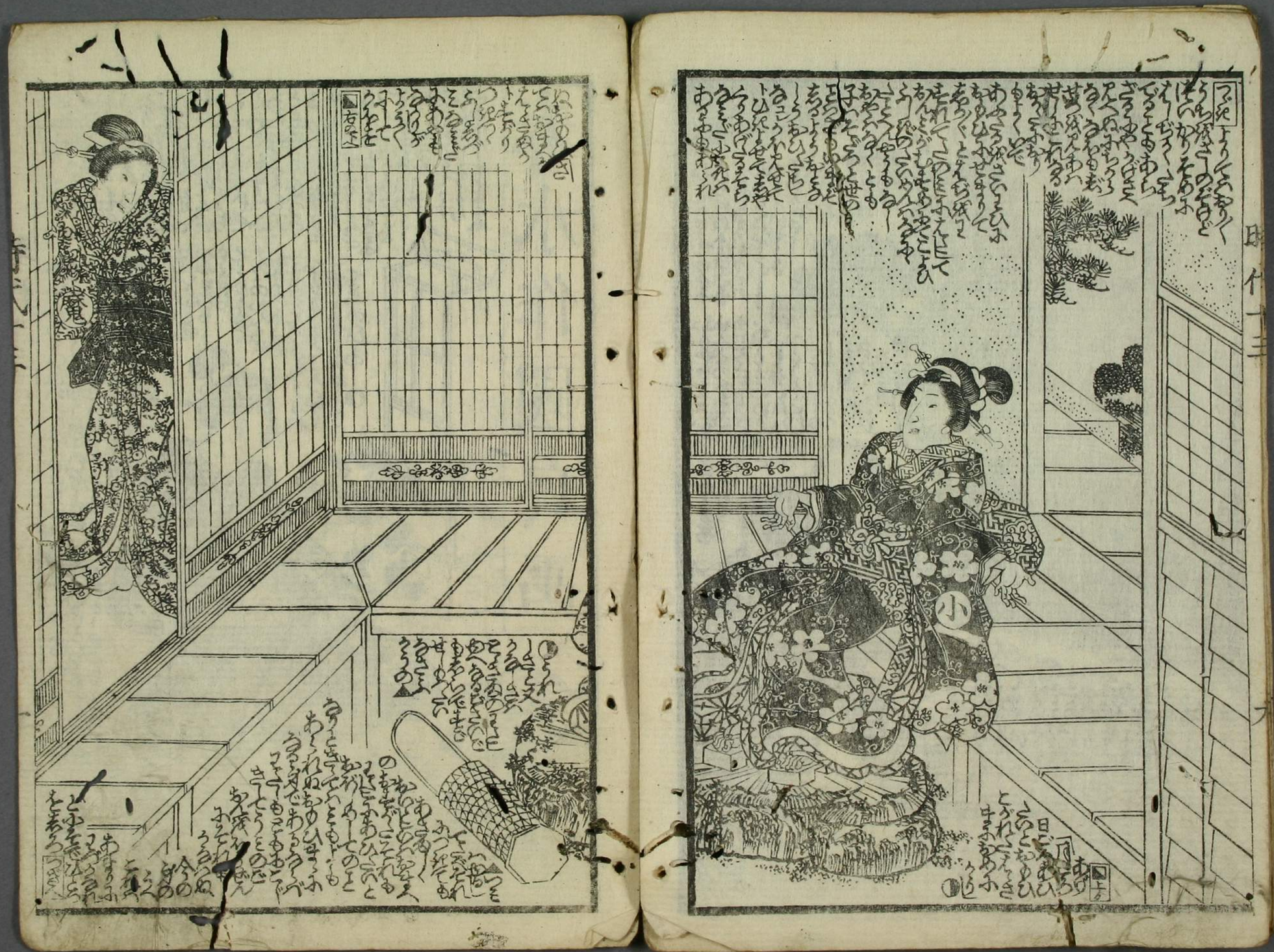
二
小







金
小
檜
世



時代鑑腹稿豫言

春水作
國貞画

十二編の物語ハ腹稿ふるゆ枝葉のさくけべ正香丹四郎の代ハ後輯ふ延
十三編ふハ那世知平ゞ奸計ふより品七夫婦ゞ大尼雑賢婢阿谷ゞ忠義
の赴き十四編ハ越後のたゝ～～緯をろして悪僧戒念ゞ倆伎由縁の亟ゞ
智弁をゝりろく～渠を躬方ふ法くるより正方と哄誘五重の宝塔を
建立させ朝日の弥陀を蔵るより尾上之助ふ罪を負せ草履とり
で面を打の最オるゆろうる一段ハ吏長けまべ十五編十六編ふも
描を躾方の物ぐろう續いろく丹四郎ゞ傳ふいろる
○因ふいふ前世の変所ふ福乞義屋市瀧水と名ハ戒会
晒野ゑるべを紙おゞるひこゞひ～ゝるり恁る兼偏ハ又も
ゐるべ～ 看官倖よ宥恕あれとまろつよ

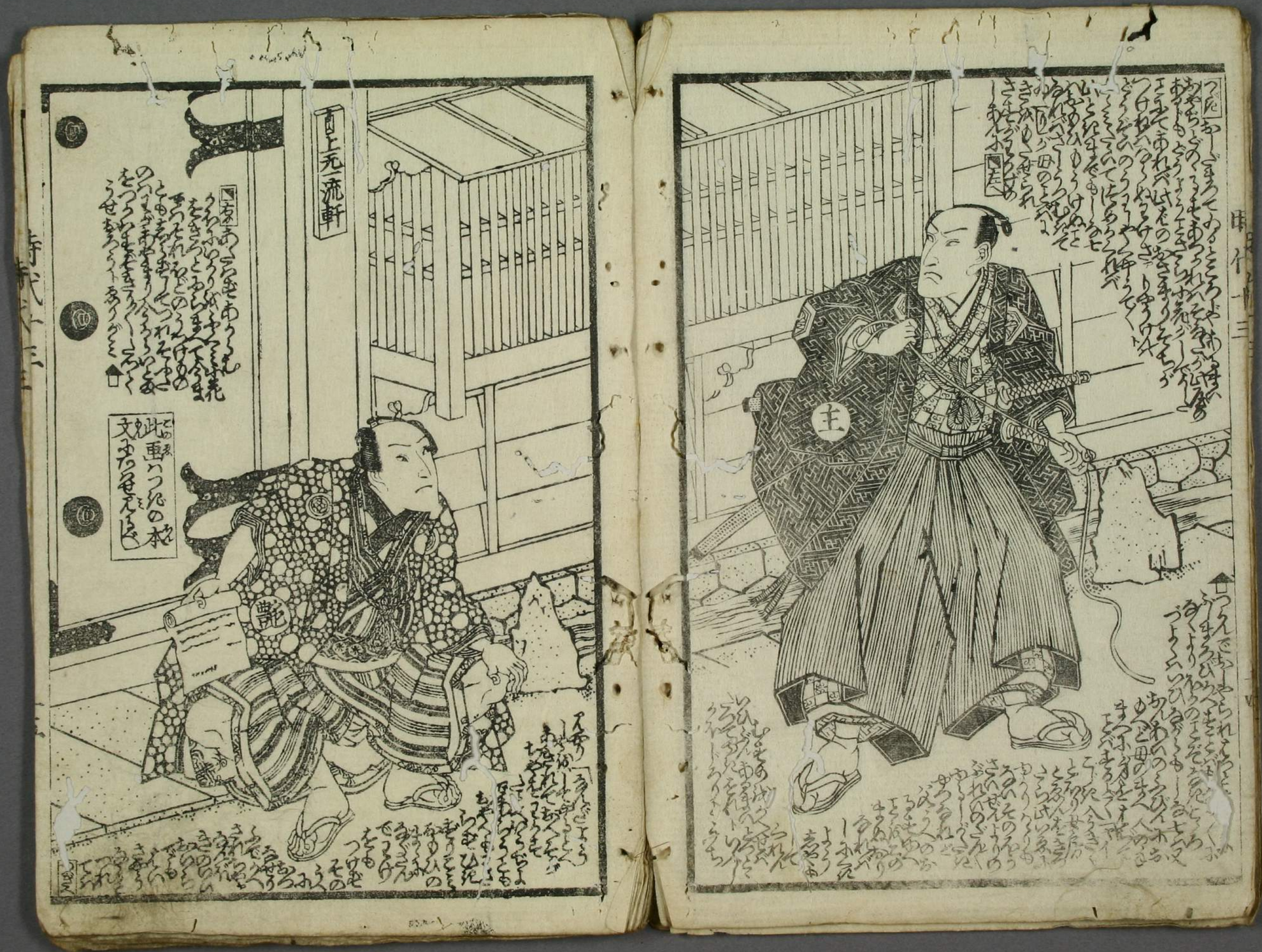
十三編下

當永美水作
歌川國貞画

小
品
世

世
浦

金


主
艶
上元一流軒

品
谷

世
金
小

中へ
上方
小

安政五戊午春新販目録

地本草紙問屋 芝神明前 若林堂 若狹屋与市梓

春雪新談 時代加賀見十一編 十五編 春水作 國貞画

一説一編 讀切新話 雜談雨夜質庫 三編 爲永春水伯 四編 一陽齋豐國 門人 國郷画

彦狐 六編揃 國貞画

鄙物語業平州絞 四編五編 光彦作 國貞画

七変美談時代鏡
十四編上
仇討曲輪日記

爲永春水作
歌川國貞画

時代鏡十四編上

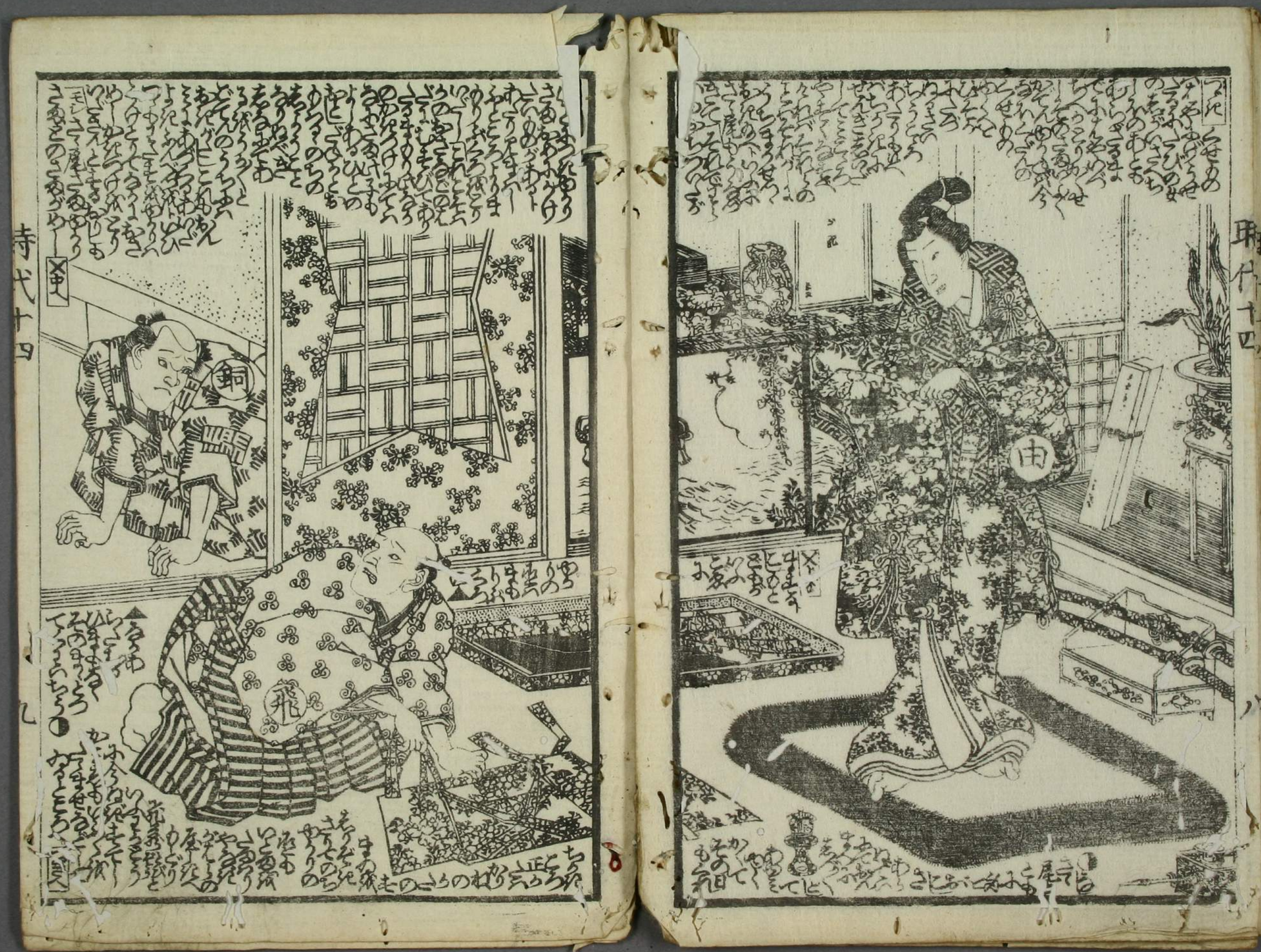
若林堂發行

軒端くゝ燈籠ばたけ。稚幼ゝ盆唄調ふ頃は来陽の新版の。仕上ばや急ぐ。
倉卒にて筆を採ることゝ。簡ふ風客あり。草稿を閲して難とせのみ。什麼這策子
の首巻なり。越前の国梅津の城主荒地ゞ吉文殿物ゝ。ゝふ見せ。ゝ月夜の魂
火何処へやら立消のせ一如ゝまてのまゝ其意を分解せも。是は奈何と
氣と付られ。ゝ一百も合点とゆゝゝゝ顔で回答はれど。軒燈籠の
ふらつゝとまけこ報ひは書房ゝら息も切籠を促られそ盆ゝい
合盟と日の延も有さゝ急作ふ再発まゝ元
荒地がゝ人殿
記ぎまふ
こそ
ゝもあらば那因果坊ゞ物語ゝり。

荒地の息女
十六夜姫

由
正

新
正
世
由


時代十四
時代十四
由
飛
銅

由
南都
東大寺
釣鐘建
戒

春水作 國貞画

風流繪半切

地前奉書 洲浦進物 仕立全入り 色彩絵 伊豫奉書

新製 面さし

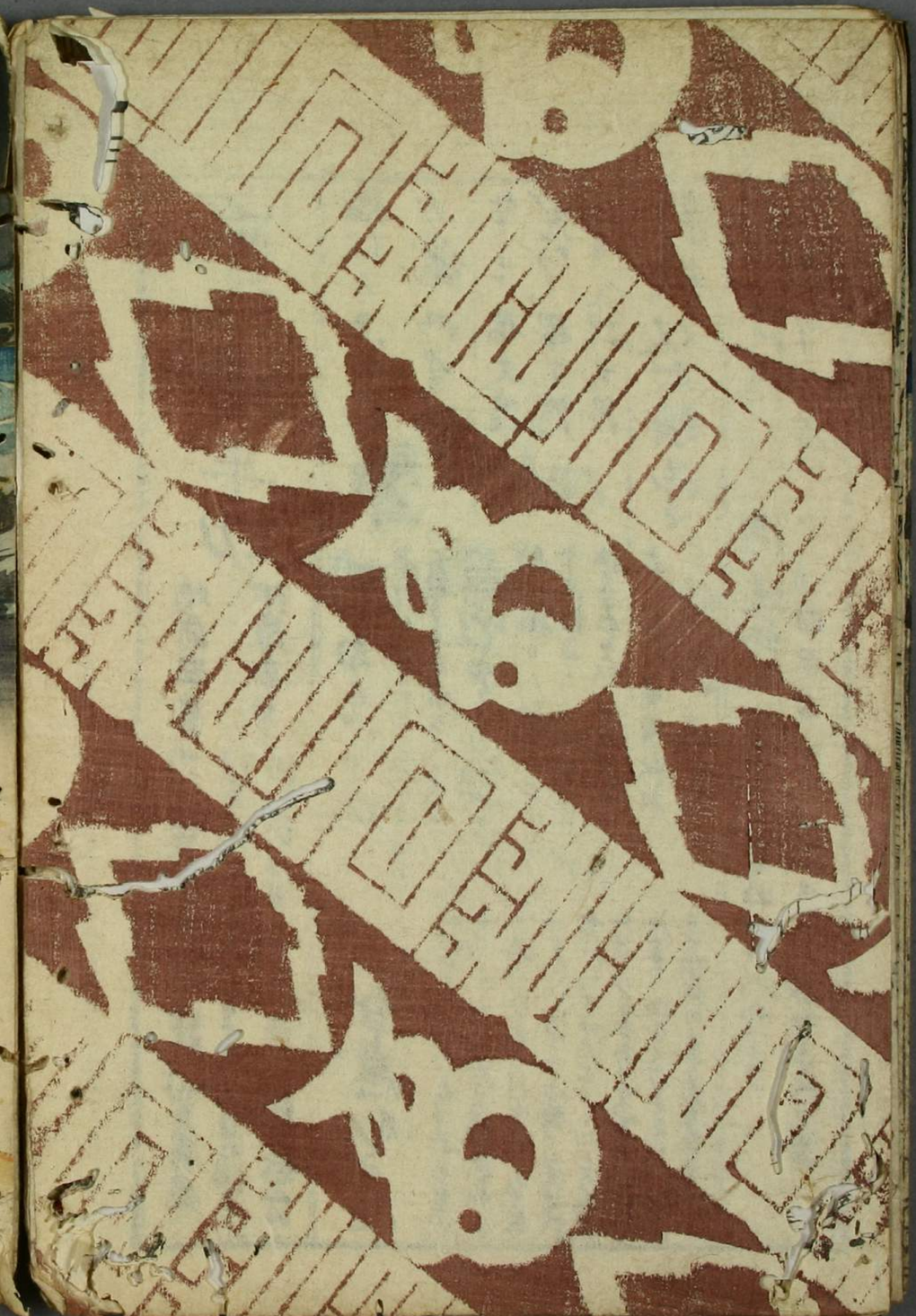
新風 智恵かるた

新板双六類品々

奉書摺長板新形

東京代理 東京三浦

十四編下
歌川國貞画



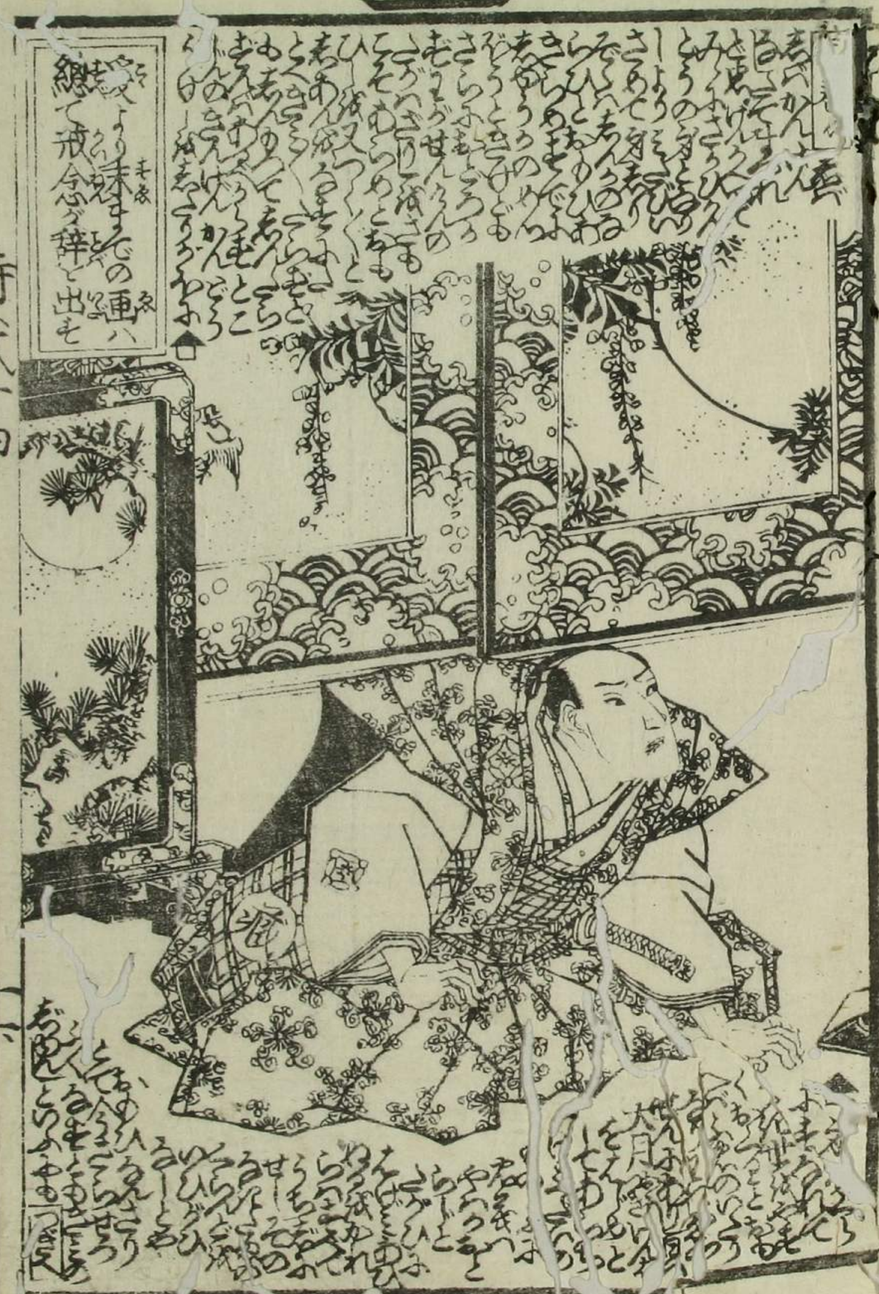
由
戒

由

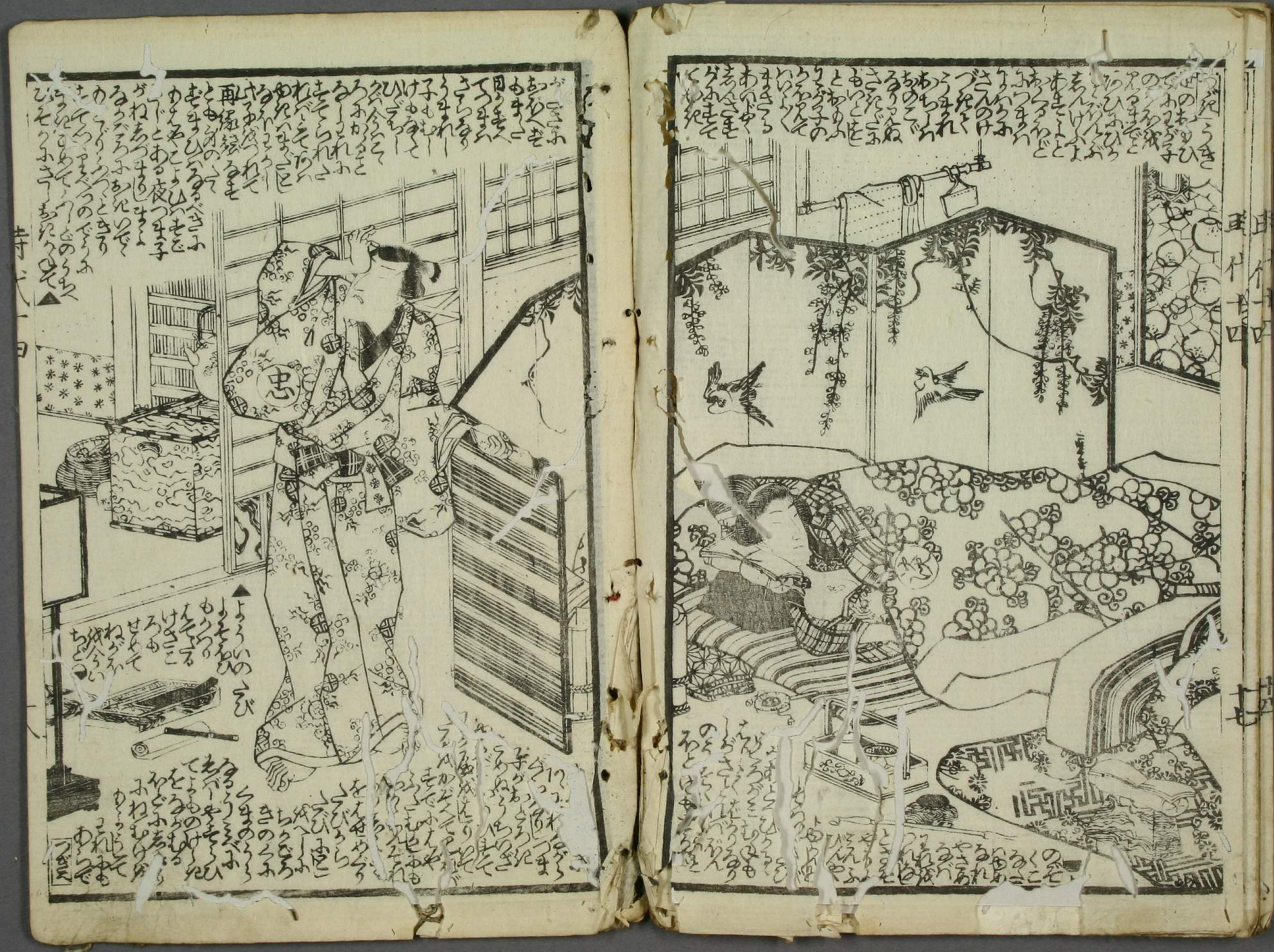
戒

由

戒


妹すその重ハ
總て戒名ゞ辞と出そ

忠
滅



英

釣鐘基立
戒

英

戒

文久三癸亥年新刻目録

北雪美談 時代加賀實録 廿七編 廿八編 廿九編 爲永春水作 蝶蝶樓國貞画

雜談雨夜質庫 六編 七編 一説一編讀切もの 爲永春水作 出板門 一陽齋豐國画

庭訓武藏鐙 應賀作 六編揃 國貞画

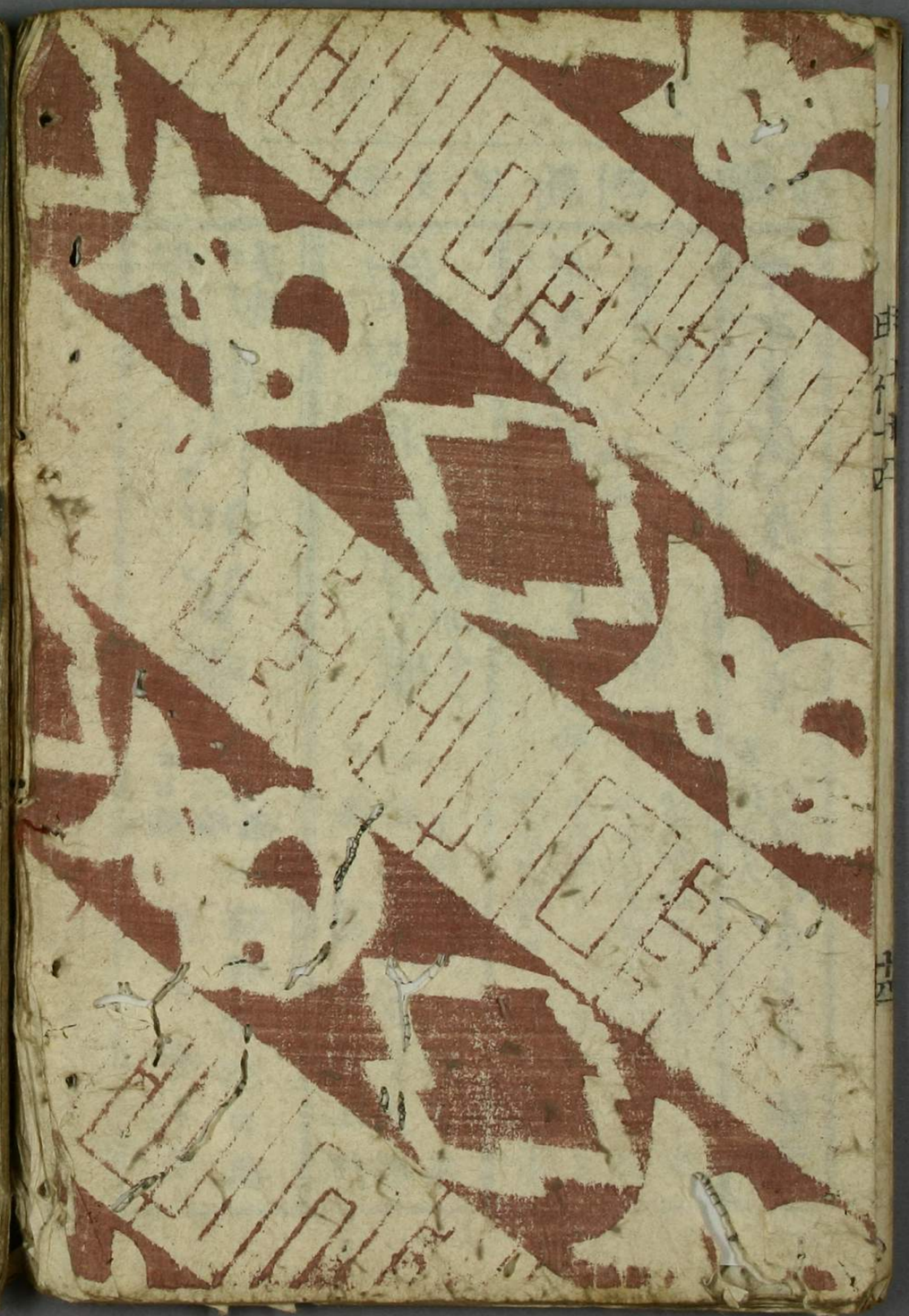
東園扇 の名刻形

地本問屋 若林堂 芳賀的方 狹屋孫兵衛

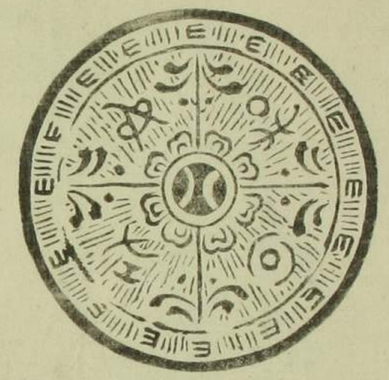
北雪美談時代鏡

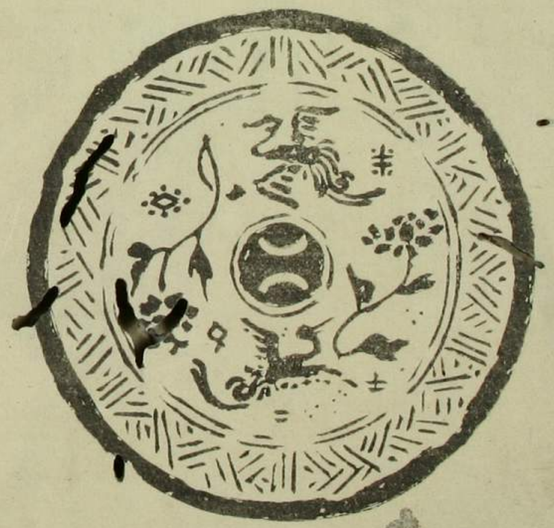
十六編上

春水作
國貞画



時代鏡十六編上





春水作國貞画

演義ハ小技なれども其性情と辨へ方俗と考へ萬類の形容をもて儒と道と異ふせず

小バ僅の國字冊子も讀ふ隨ひ目ふ熟ぶ教導の切實早學問と已ず便次の手前ハ曾も甘いと辛いハ巧拙のその差別ありよくも思ひて皐毛と俱ふ長々〜茲ふ二八の編成綴ぶど蕎麥より延び〜作者の腹稿末いと遥けくあらざる猶寛やふ賢覽と乞ふ

己未
陽春

爲永春水記

山川直記自信

苅根の方圖
呪ハ奇病の躰

正
竹
笹
直

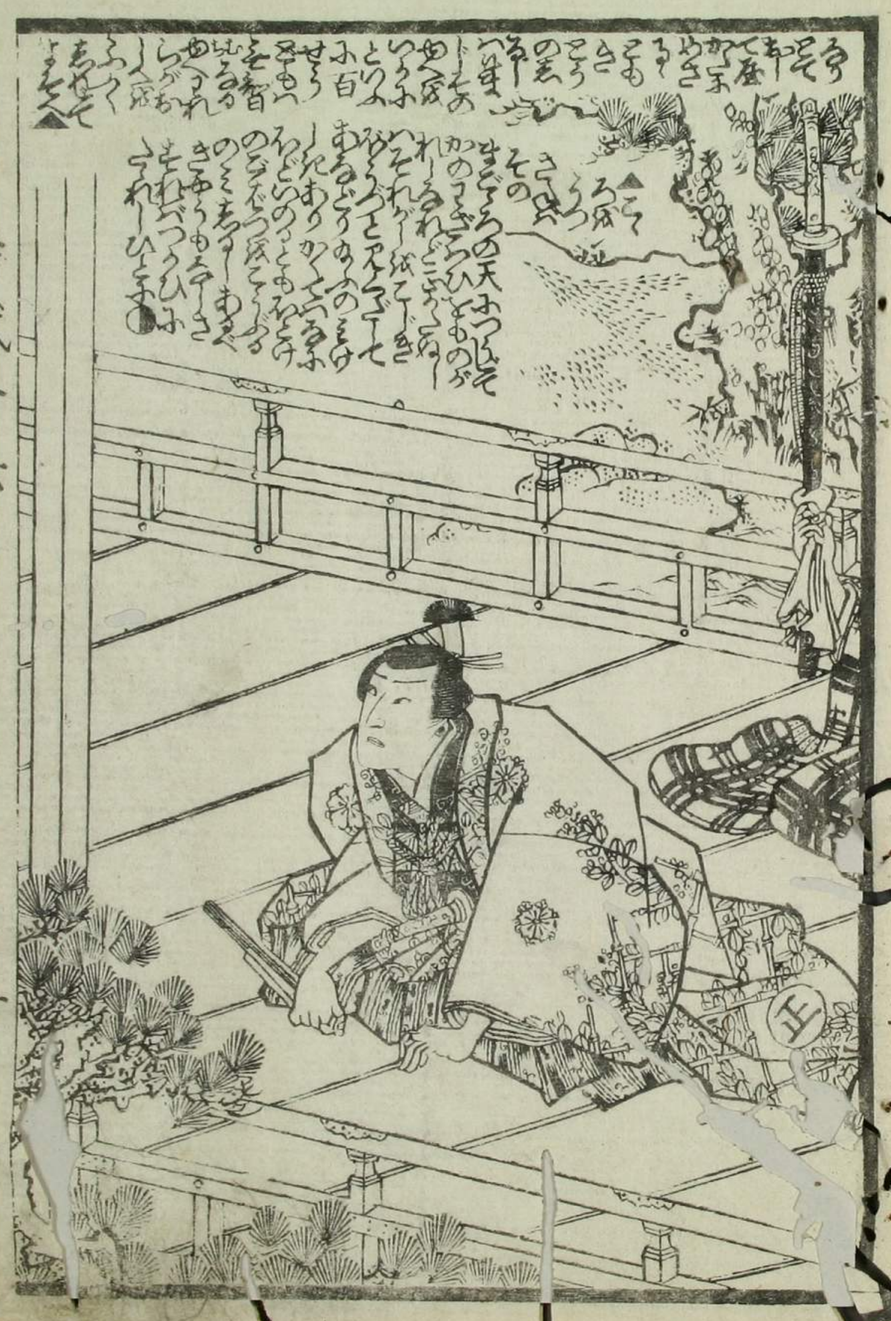
正

君命を傳んと
直記戒念草菴
つる圖
正

直

戒

笹


正

爲永春水作

梅蝶樓國貞画

北雪美談 時代加賀見腹稿豫言

十七編は因果坊成念が計つて定ふ入るの一段續いて宝塔建立のと朝日の弥陀を安置すよろ尾上之助が死失の災難爰ふていよ〳〵春辰が草履をもつて面を打のおもむきを貫目とす 十八編は前輯ふ漏る綽を綴りあり姑く話説大和ふ轉じて彼荒地の遺子英壽丸と唱る変生女子の形容と形う十六夜と假號し法く竊ふ躬方を捨ん為心願と称つて攝待旅籠をたのもれ一段爰ふい種々の可笑あるべし 十九編はその摂待ふ泊り残弱めし老弱男女の器量を試も此段殊ふ巧ミ形まで豫胃中の機密を泄しかつてなく〳〵言ひ備 二十編はふいろ〳〵ふ大和の段を編果て婦尊あり閣る正香丹四郎が武名の傳記蜂沢が花作と変名し〳〵その妻阿十字と奸悪の物語り那死上大等ふ及びて又一入の見所あり這ハ復長譚あるをもて 廿一編は説こゞもと真もわるんふ欲小し〳〵後ふ再び多賀の話説ふろう雪若が智勇の傳あゞ引続きて 廿二編は説こゞもと真もわ覽ふ入るべし と謹て白す

板元 若林[illegible]

介題曲の二周目
十三
秀梓
林堂

時代繪 十六編之下

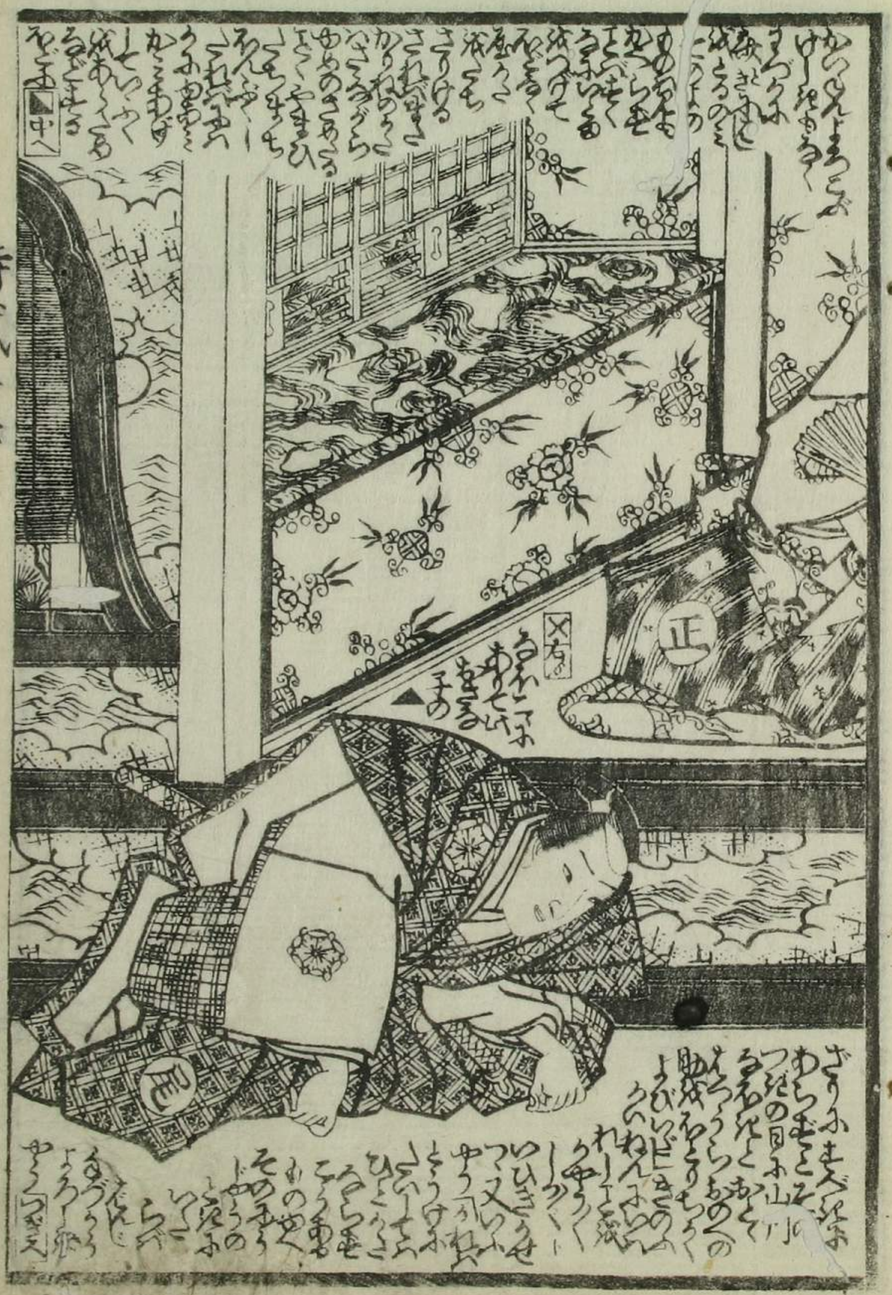
美水作 國貞畫

戒

酒

直

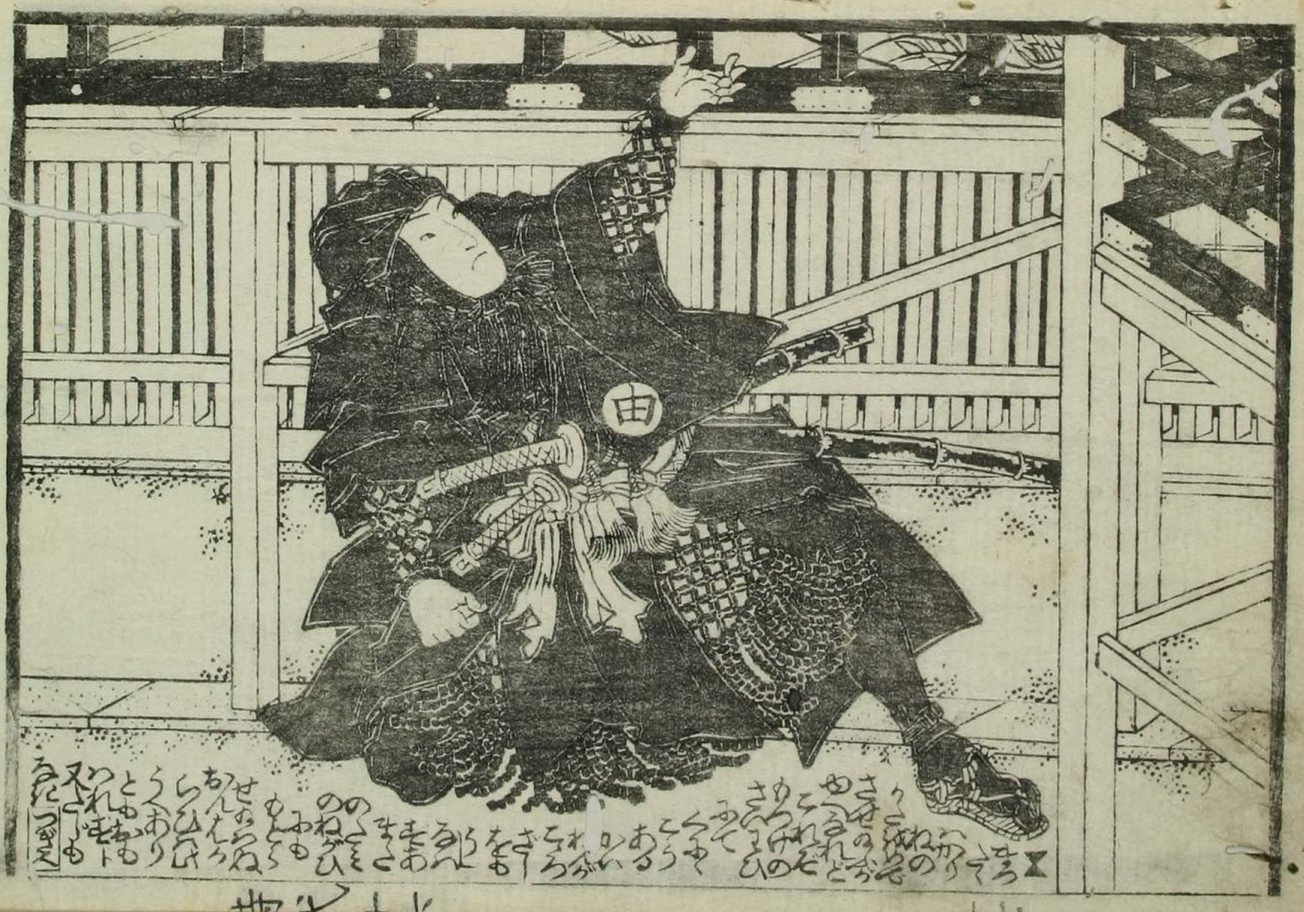
戒



四
尾

直

笹
此画のまけ、後の
教文成読て自ら
味ひ知るべし


由

直
尾

ゆ
村

つぎへ　ところまるゆそ
あ人へこころえ
かの名づめを
うけとりて
ぐちゃぐちゃ
こびへろん
とのまへ
そうりゃう
紙よびあつ
め山ようり
あまりこの木紙
きりいぐさせ
とれば紙木ぐさせ
るどまるわぐぶ
を糸いまくと
名ぬりとも紙
ふぐびぬく
ちゃまよび
いぐーなば紙
まるにこまも
わぐぶひらぐ
よろとびかーと
まうてさてがつ
あうぐつちの
あうぬ一町ぼんの
やらの紙ぬつせ
ことところ木紙
ゆうけやらのの
ことあへまく

うちまちせー
うちまちまちまくわ
かりあれ紙まつらい
ぐいわんかゆうーやうの
ようーのこーまぞ
このひーろぐその日の
いるるぐあへまちけ
る

九月十七日
入定
因果坊戒念

朝鮮牛肉丸
一色百孔
浦ひ
沙参
用ひくすり

新製
染崎武製

爲永春水作
梅蝶樓國貞画

浄書 青洲

安政六年己未春新板目録

北雪美談時代加賀見　爲永春水作　一壽齋國貞画
十五編より二十編まで出板

雜談兩夜質庫　爲永春水作　一陽齋豐國画　一曜齋國郷画
四編より六編まで出板

庭訓武藏鑑　六編揃　柔亭志賀作　歌川國貞画

御進物御菓子　玉屋の型紙入箱入有り
入表紙本色四角仕立御用向御菓子帝上品

地本錦繪草紙問屋　若林堂　芝神明前　若狭屋與市

雪美談時代加賀

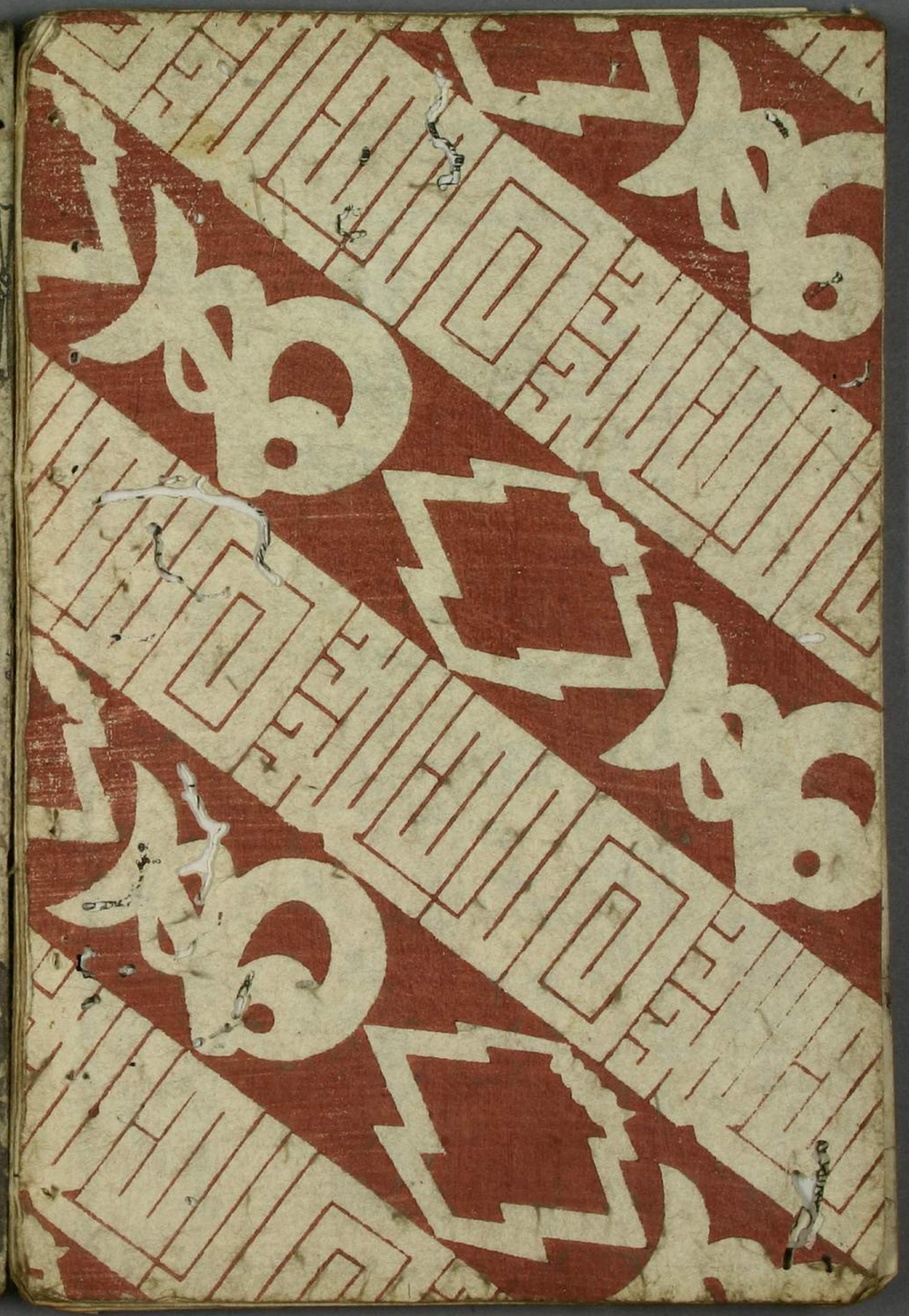
歌川國貞

北雪美談

七

芝神明前

若狭屋與市板



春彩画
國貞画

時代加賀見
仕舞用之図会
上編
春の美彫

地雪美談時代加賀見
芳林
春水作
十八編

化題曲者同士
十八編
己未秋板
國貞画

北雪美談時代加賀見

十九編下

申の春 若林 梓

十九編上

外題曲亭馬琴

爲永春水作

一壽斎國貞画

花ごよみ 續十九編

下の巻

春水作

國貞画

北雪美談 時代加賀見十七編序

大約稗史小説ハ理ヲおいてくるれどころも。竟ハ事のひらく所。その妙緒上ハ顯るれバ。巻紙開て閲る者。端ちくゝて喜び。端ちくゝて悦き。端ちくゝて泣き。端ちくゝて咲ハ。喜ハ一もるハ文の緑。悦ちくもるハ新奇妙言。泣一もるハ義理分明。笑ハ一もるハ滑稽洒落。這四のものハ具らざれバ。讀ゆも堪ぞ。看るゆも忍びず。忍巻紙投ちゆ至らん。ハ知りちくゝ。賢バ。才ゆ。人の欠ひの種本紙。蒔も久し。紙長物語。今稔ハ鬼も十七編の。此一見ところも。ひらぐき紙。山茶の出花。亀も香も。薄紙策子の端文ゆ。例の支とそよ一もちゆ。頓淳言と述るゆちん

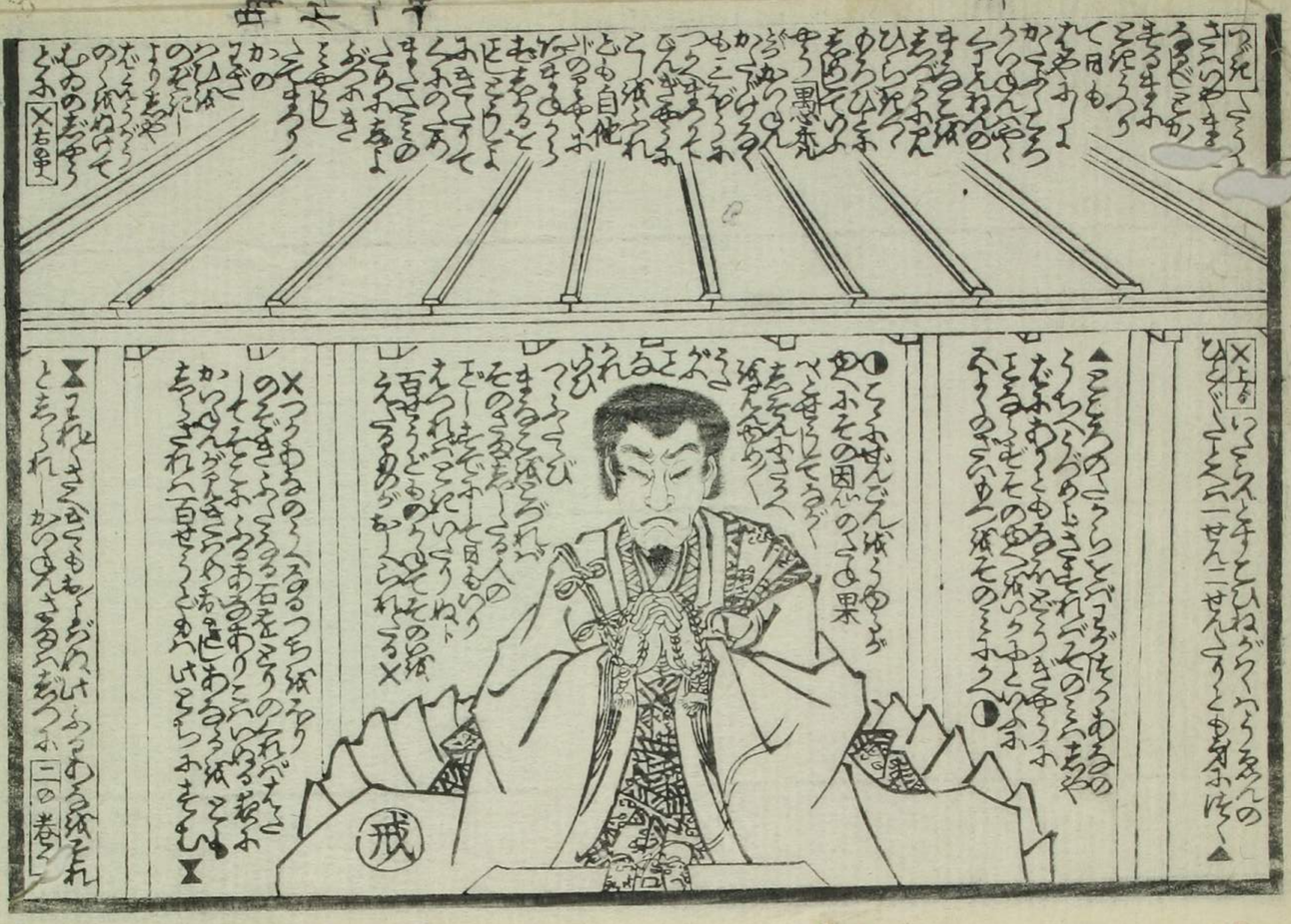
安政六巳未歳孟春吉旦　爲永春水誌

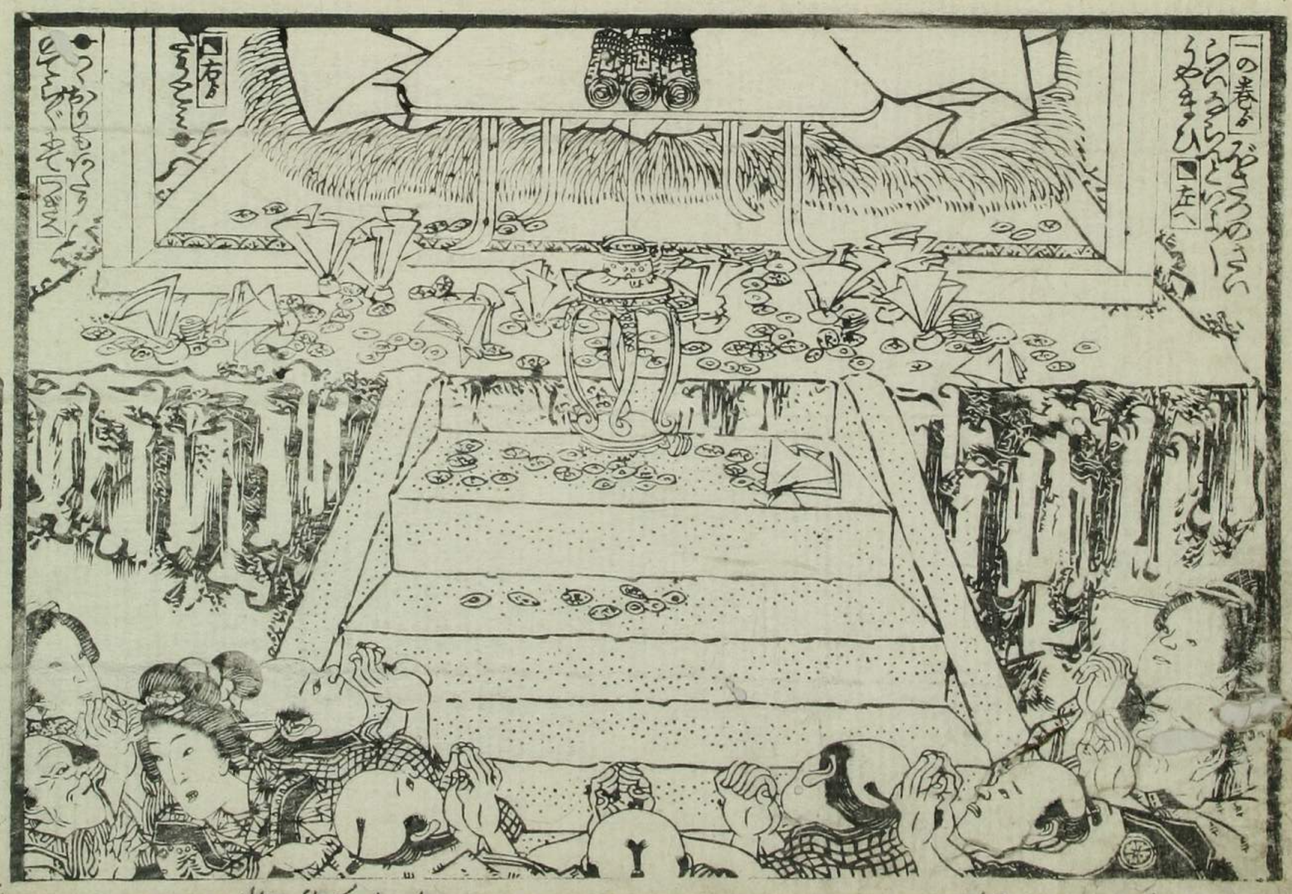
笹尾
時代

愛之助
正方
郁根

苅根ゞ掃病床の
祝と號しく
京師の女舞と
召ま綷ハ
本文ハ見も

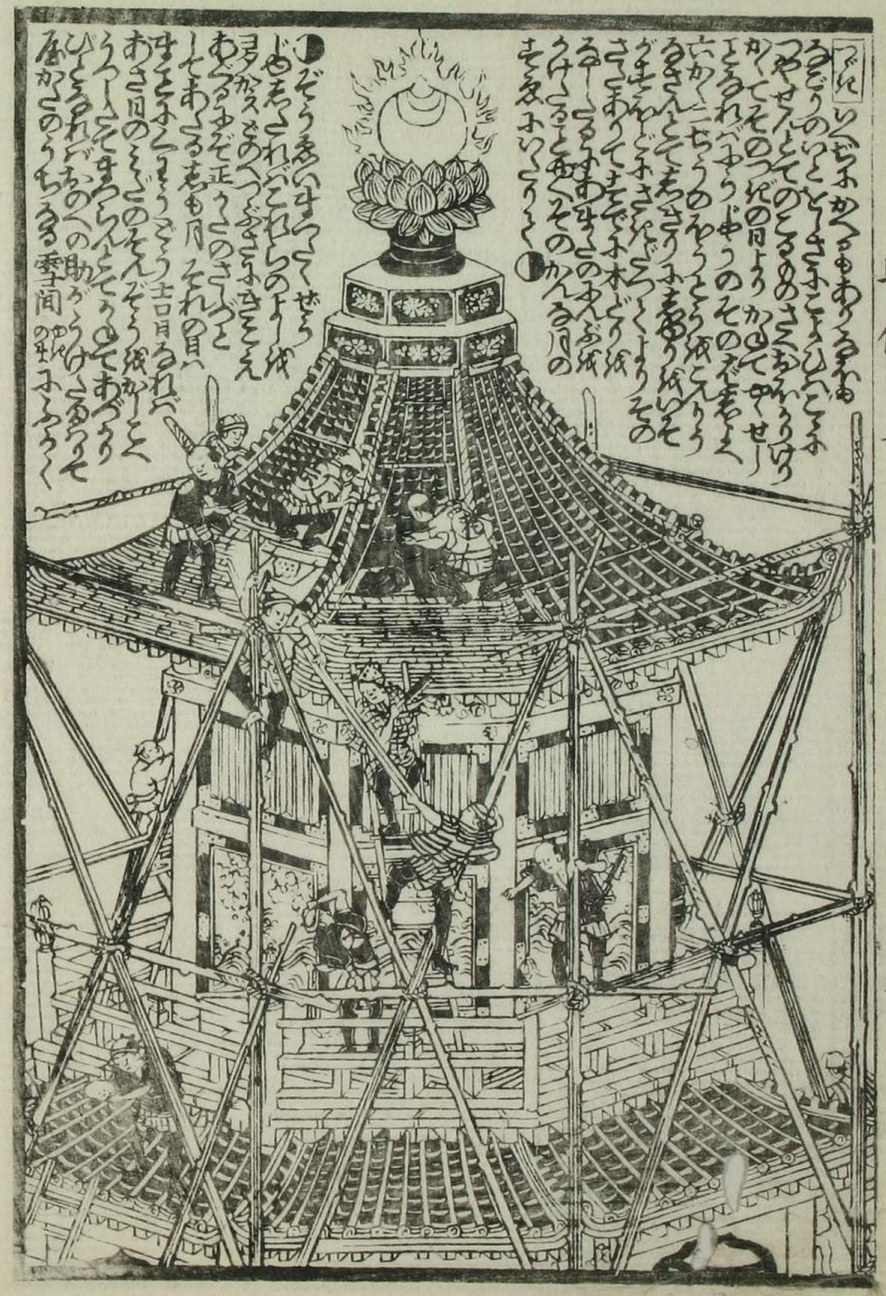
戒念が入
定法諸民
送りの圖

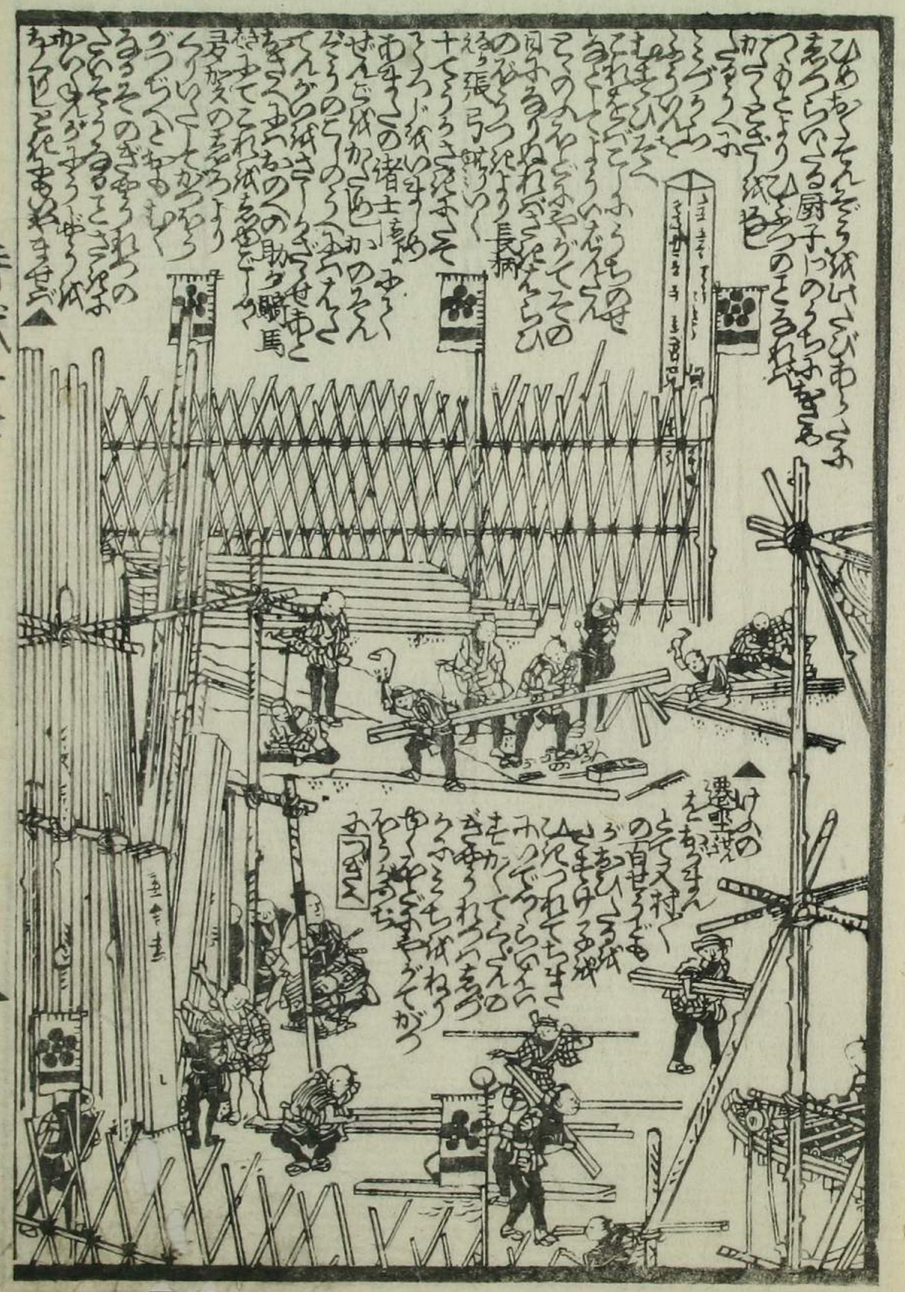

戒



銅
鉄

這画は戒念が寫の裡なる形狀と圖も
緯は末の譚りふ見や
戒





由

亜

春水作
國貞画
浄書
箕田
青洲
鋏

三
七尾津

戒

由

古
悟

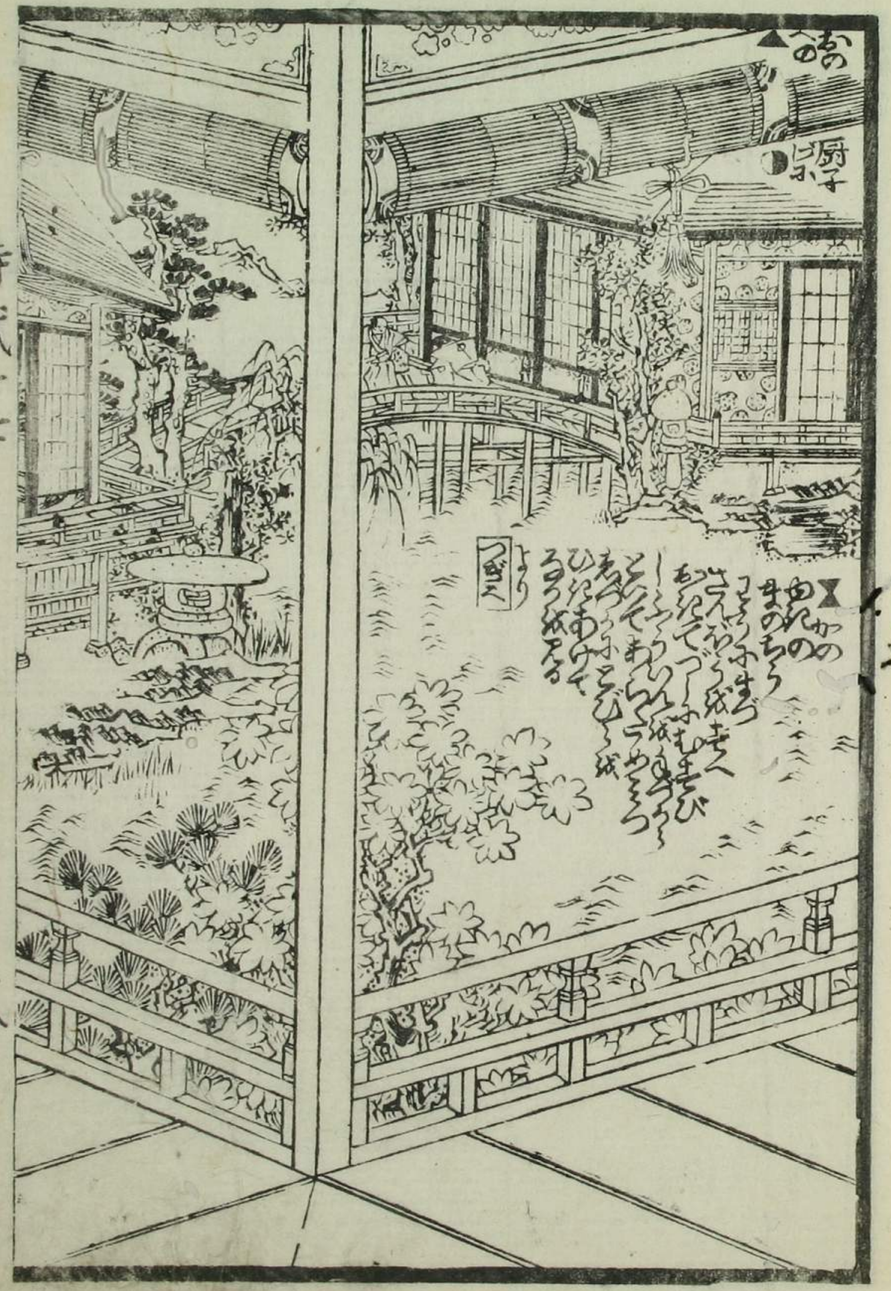
つぎ
鍊
戒

由
笹

正

尾
内
田

尾



朝鮮牛肉丸 一包百銅
味ひの佳絶ひぶんせの美味子
対馬屋 深崎氏製

爲永春水作 一壽齋國貞画

○岩藤ゲ亡靈

北雪美談 昔代加〻見 十八篇

叙

常ふ言を食るものハ閻羅王の聽ふらう。舌を拔らるとぬん言つ。是まゝ食言の親王ぬく。空をはるせぬ為ふも。嘘をりてとれを戒む。尓まバ佛の方便も。一切衆生を救ん空言ある〻や。實ふうそ〻〻出〻真ふぶねバ。根ゞ〻ぶぬ〻ハ七段目の。由良ゞ金言鑿せる哉。嗚呼虚語ぬ〻可もなゝ〻。又不可もあゝざるものハ今這時代加〻見ぬん

安政六己未夏稿成翌庚申春發行　爲永春水誌

一子鹿吉
初浦の
老僕
弥次
兵衛

尾上之助の
妻阿鐘
下奴
勝平

時代十八
越路の換作

日代十八
直記の娘若紫

尾

國貞画

春水作

勝
元

爲永春水作

梅蝶樓國貞画

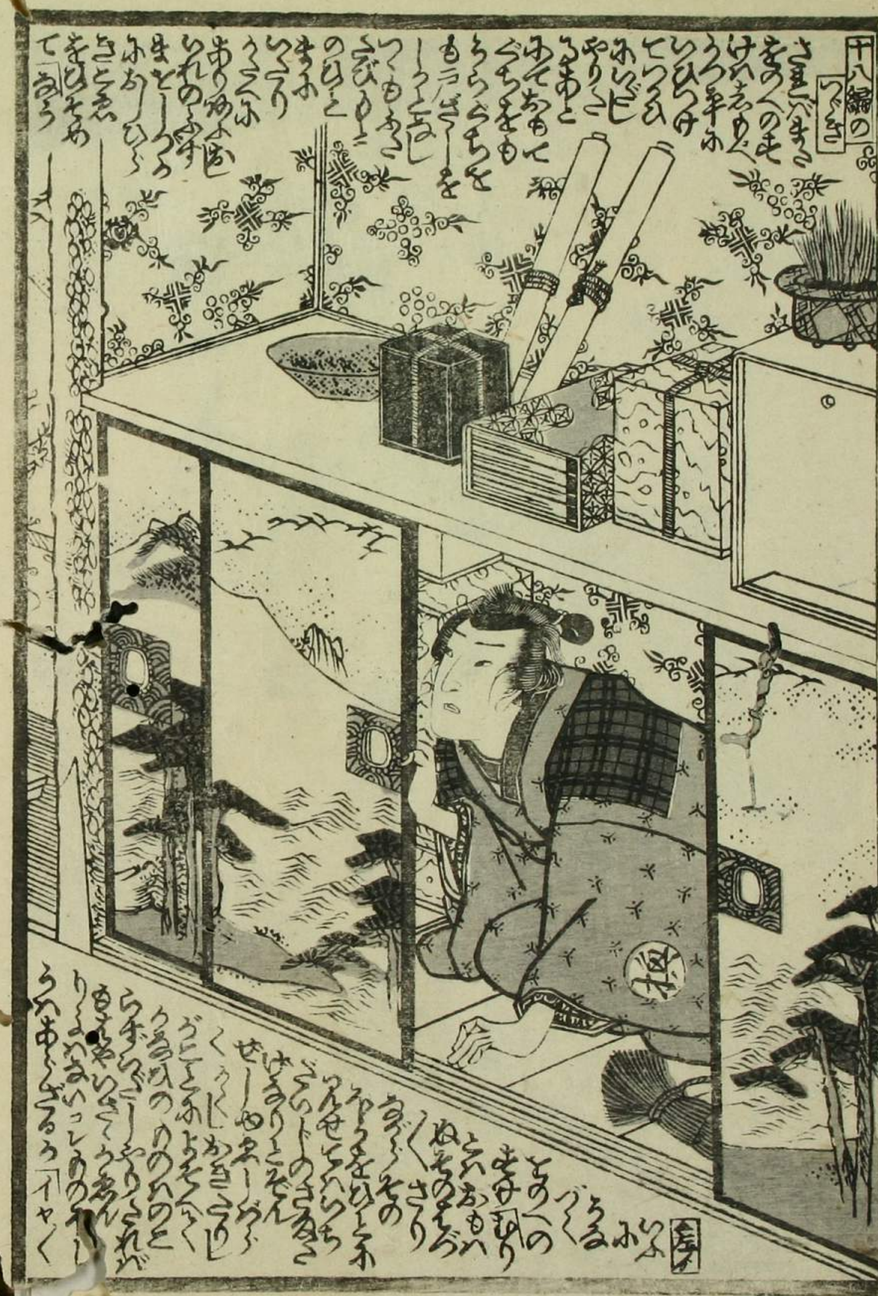
積善の家ゆゑ餘の慶あり。積不善の家ゆゑ餘の殃あり。と。仏の因果を説く。應報の理を示す。輪廻の環のめぐるが如く。必ず已ゆゑ出でるより。已ゆゑ復らざる事なし。善報も惡報も亦よく遲速あり。其を得ざる速きに則その身ゆゑ報ひ。遲ければ子孫に及ぶ。今這編は著を所の浪花の市客二三太郎。俠氣ありて。擬作を恵む。偶女兒浪路あり。貴人の亂を雄せども。經母の毒手を免れて。終ゆゑ逆旅の露と消ゆ。別て擬作夫婦が義氣ゆゑの落亂を守傳きて。妻西野へ合法が十字ゆゑ。好賊由緑之亟ゆゑ討ち擬作へ又もとりあく。兄ゆゑ擬作の節は死せず。斯のごとく薄命なる。勸懲兄差別なるに似たれど。所謂過世の宿業欲。這処ゆゑ惡業滅して。善果のあるべき。開ゆゑ後輯ゆゑ説をまつべし。

安政庚申新春良辰

爲永春水記

侍女
浪路

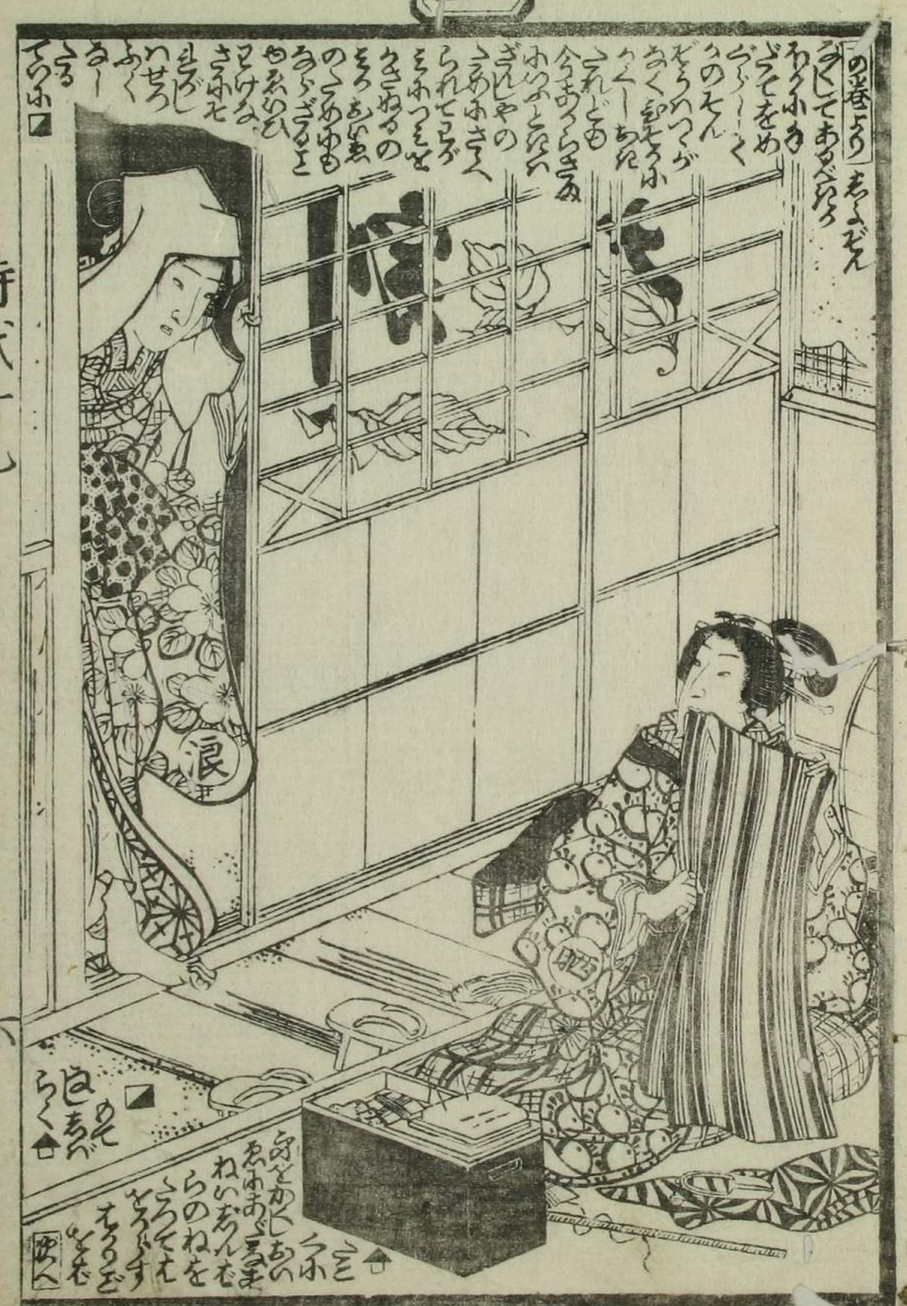
茲ハ與作この物語の狀を圖しるく文中に余情を示ス
永尾左門之介
景好



時代十九

時代十九

是より下へ四丁の画入
換作が物語を圖も



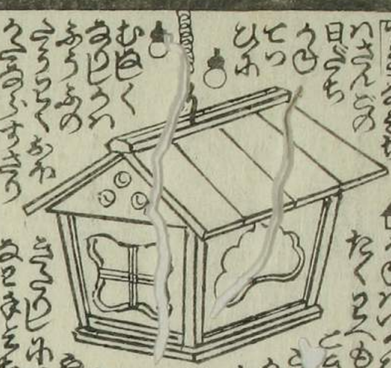
時代十九
唐崎

時代十九

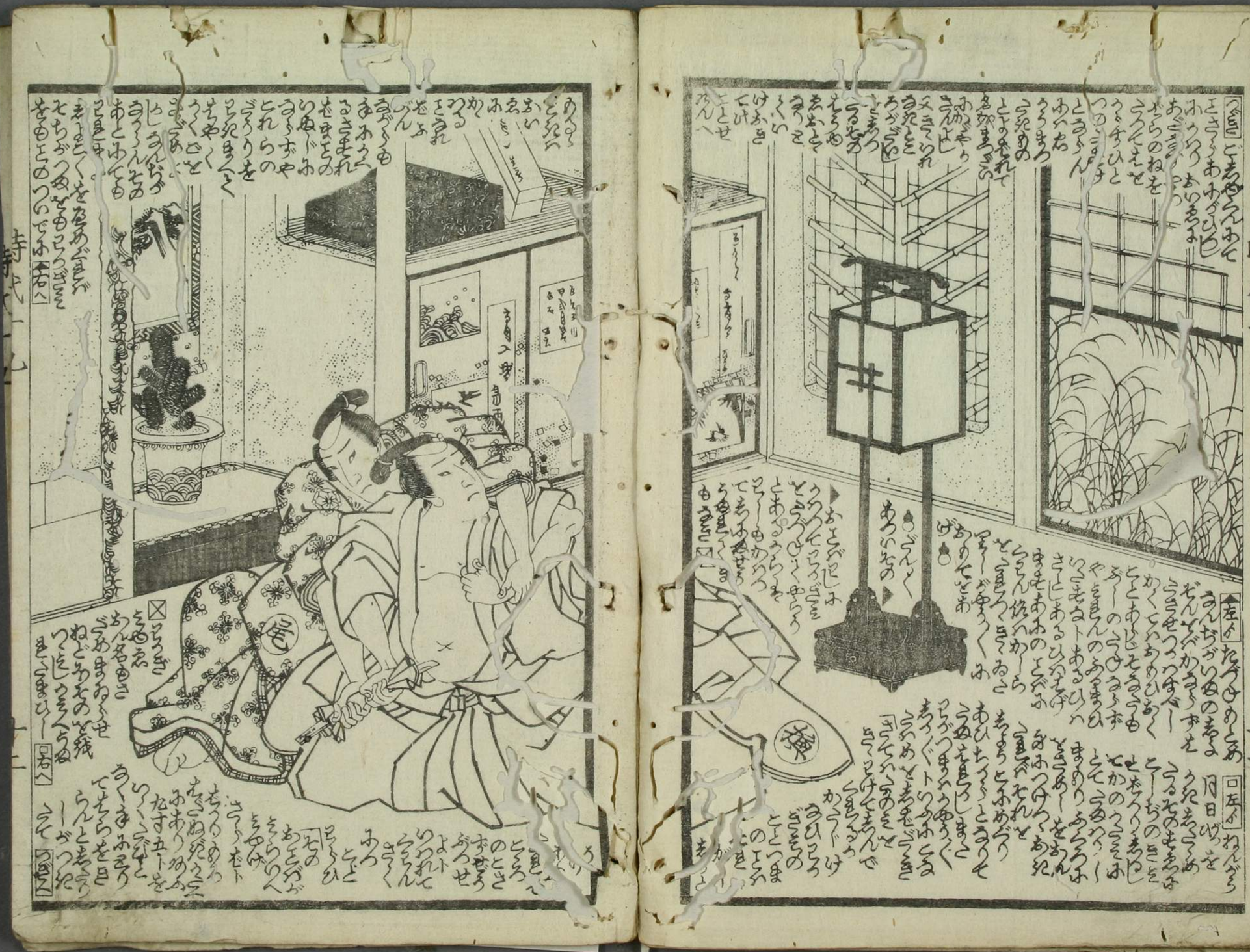
換

尾

春水作 図頁書



浄書 交來



右
左

元
雪

春水作　國貞画

安政七庚申春新刻目録

北雪美談　時代加賀實　十八編　廿一編

爲永春水作
楳蝶樓國貞画

雜談雨夜質庫　四編　五編

一説一編讀切

爲永春水作
一陽齋豊國画
出板門人　國久画

庭訓武藏鐔

應賀作　六編揃

國貞画

東園扇
の印形
御流行好資長入和漢芸苑
出来物の別て格好宜仕立
下直ニ差上申候間お求めくだ
さる為ご存じの御芸苑上候

地本草紙問屋　若林堂　芝神明前
英狩屋安市　版元